

# 天折した漢詩人 野崎玉峰

## —その人と作品

柴田清継

はじめに

明治初期の我が国の漢詩文界のリーダーだった森春濤（一八一九—一八八九）が編纂していた『新文詩別集』の第二十一号（明治十七年）は、坂口五峰（一八五九—一九三三）の甥である越後人野崎元（号玉峰。一八六二—一八八二）の遺草—『玉峰小詩』の特集号となっている。しかし、野崎元、号玉峰といっても、ほとんど無名に近い存在であった。したがって、そのような人物の作品が『新文詩別集』で特集されたのは、異例の事だった。

本稿では、『新文詩別集』同号所載の春濤執筆の一文と五峰の『北越詩話』の「野崎元」条の叙述を主な資料として、『玉峰小詩』が目の見るようになったいきさつ、五峰の玉峰とのかかわり、及び五峰が春濤に玉峰の作品を送付するまでのいきさつ等についてまず紹介し、次に『玉峰小詩』の作品の半数ほどを取り上げて読解し、その作品世界を垣間見るとともに、玉峰の人となりや生涯の一端を知る一助としたい。

—

二十一歳で天折した越後の無名詩人の作品が、その二年後に『新文

詩別集』という中央のメジャーな漢詩文雑誌の一つの号を占有するということが、なぜ起こったのか。『新文詩別集』の同号で玉峰の作品の後に付されている森春濤の文章（漢文）にそのいきさつが述べられている。それによれば、事の起りは玉峰の姻戚である坂口五峰からの依頼だった。依頼を受け入れた春濤は当時、毎年あちこちに出かけて忙しかつたので、校訂の実務は息子の森大来—号槐南（一八六三—一九二二）に任せた。槐南は五峰から送られてきた作品の中から、「沙を淘げ金を揀んで律絶三十首を得た」。作品には初めから清人王黍園（一八三五—一九〇八）の評語が付いていたが、それらはそのまま存し、さらに「社中の朋好」（春濤主宰の茉莉吟社の社友）たちと作品を参閲し、「会心の処」には評語を増益した。それらの作業において最も尽力したのは橋本蓉塘（一八四五—一八八四）と永坂石球（一八四五—一九二四）の二人だった。

春濤自身は直接かかわらなかつたとはいえ、彼が作業を委託した蓉塘と石球は春濤門の四天王と言われた人たちのうちの二人である。この点に、春濤が四十歳も年少の五峰からの依頼を粗略には扱わず、むしろ相当に誠意を込めて取り組んだことが見て取れる。

五峰と春濤とのかかわりについては、田宮覺氏が詳細な研究をしてくださっている<sup>1</sup>。それによると、五峰は明治（以下、「明治」の年号は支障のない限り、省略する）七年から数度上京して、春濤に詩を学んだ。春濤は五峰の作品を「剛健の気を帯び」「理屈に長じてゐるから古詩大作にふさはしい」と評し、春濤主宰の漢詩文雑誌である『新文詩』・『新文詩別集』・『新新文詩』のいずれにも、五峰の作品は掲載された。

<sup>1</sup> 田宮覺「森春濤の来越について」、本誌第二十一号、二〇一八年。

十四年に春濤は二十年越しの念願がかなって来越を果たした。その滞在中、五峰は『新潟新聞』に春濤来遊の広告を出したり、自宅に宿泊させたりする等、手厚くもてなした<sup>2</sup>。

なお、『新文詩別集』同号に掲載された玉峰の個々の作品に対する評語には、槐南によるものも付されており、王黍園を含め、評者は四人ということになる。

ここで、王黍園に若干言及しておこう。黍(漆)園は号で、名は治本である。王治本は明治の初めに渡日し、数度の帰国を挟んで足掛け三十数年日本に滞在した。その間、東京や横浜を本拠地としながらも、北は北海道から南は九州まで、全国各地を回って、それぞれの地域の文人たちと漢詩文上の交流をした、極めてユニークな人物である。彼は何度も長途の漫遊を行ったが、その二回目が明治十六年夏から十七年末にかけての越佐の旅だった。

王治本は旅行に出る際は、懇意の中央の漢詩人等を介して、出発前に訪問先の有力者当ての紹介状を書いてもらうのを常とした。十六年の八月、彼の新潟到着の八日後、『新潟新聞』の「稟告」欄に、春濤が王治本を数年来の親友として紹介し、「何卒僕同様御周旋」くだされたと懇請する広告が掲載され、その十二人連名の宛名の一つが「坂口仁一郎」だった。五峰と王治本との交流は遅くともこのころから始まっており<sup>3</sup>、五峰はその交流の一齣、既に他界していた玉峰の遺構

<sup>2</sup> 田宮覺氏前掲論文一九七―二〇〇頁。

<sup>3</sup> 王治本の越佐の旅については、かつて本誌に次の二篇の拙稿を掲載していた。王治本 越佐の旅およびその間の詩文交流——明治十六、七年を中心として(第十五号、二〇二二年)、「王治本 越佐の旅およびその間の詩文交流——追補」(第十七号、二〇一四年)。

を王治本に見せ、評点を依頼したのだろうと考えられる。

## 二

五峰の玉峰とのかかわり、及び五峰が春濤に王治本の評を付した玉峰の作品を送付するまでのいきさつについては、『北越詩話』卷十の「野崎元」の項により詳しく述べられている。それを要約し、漢文訓読体の原文を平易な現代語に変換する形式で、紹介することしよう。文中の「私」はもちろん、五峰のことである。

野崎元、字は士亨、玉峰と号した。本姓は玉井で、中蒲原郡早通村(現在の新潟市江南区の一部)の人。野崎氏を冒し、新潟市沼垂に住んでいた。「冒」とは、この場合、養子になることである。この野崎家の養子になるということがいつ、具体的にどのような事情、どのような形で行われたかという点が、彼の一生全体を理解するうえでも、また、彼の作品世界に対する理解を深めるためにも、かなり重要だと思われるが、残念ながら、それらの点は不明である。五峰の叙述に戻る。玉峰は、私とは最初の妻(二十二年に死んだ波磨子)の弟という関係である。「長身玉立」で、「貌、美女の如く」、穏やかで素直で折り目正しく慎重深く、「娘子秀才」の風があった。生まれつき、体が弱く、俗世の喧騒が苦手だった。一室でじっと身心の平安を保ち、物事にとらわれず自適し、妄りに人と交わろうとはしなかった。そのため、私は挨拶を交わす程度で、彼が詩を善くすることを知らずにいたが、ある

<sup>4</sup> 「娘子秀才」は、袁枚(一七二六―一七九七)の『隨園詩話』卷五に見える「程廷祚は『閒静修潔』(物静かできれい好き)だったため、『娘子秀才』と称された」という逸話を踏まえた表現。

時、村杉温泉（現在の阿賀野市）からの帰途、彼が我が家に立ち寄った際、雑詠一首を取り出して見せてくれた。私はその時、彼が詩を学んでいたことを初めて知って驚いたが、寺田小陶に詩を学んだものと考えられる。ただ、小陶の詩は俗習が多いのに対し、玉峰の詩はさっぱりとして清らかで、俗世を超越したところがあつて、全然似通っていない。その点を私は非常に奇異に感じた。私が「君には仙骨が備わっている。怠らずにやってみれば、きっと『作者の域』』に到達するこゝとができるだろう」と言つてやると、玉峰は喜んだ。彼が沼垂の野崎氏に「贅」（前の「冒」と同じ意味で使われていると見る）した頃、私も新潟で暮らすようになった。信濃川の兩岸という位置関係なので、往来に好都合で、それ以来、玉峰はしばしば姉の様子を伺いかたがた我が家に来て、作つた詩をたびたび見せてくれた。私は褒めて奨励した。玉峰はますます喜び、詩のレベルはぐんぐん向上した。壬午（十五年）の秋、伝染病（コレラか）が大流行し、数百人の死者が出て、特に沼垂が惨毒を極めた。玉峰がひと月余り姿を見せないの、妻がひどく

5 寺田小陶（名徳裕。一八二八—一八九三）は『北越詩話』巻八に立項されており、その漢詩作品も五首掲載されている。その他、小陶については渡引礼子氏の「明治初期・沼垂町の教育と寺田徳裕」（『新潟近代史研究』第三号、一九八二年）に詳しい。旧会津藩士で、明治四年、沼垂の有力者の聘に応じてやって来て、有隣館という私塾を立て儒学を教授した。同五年の学制頒布により小学校が設置されると、その校長となり、かたわら塾生の教授に努めた。その塾は同二十六年まで存続し、「一郷の子弟、其門に出でざる者」はなかつたという。

6 「作者の域」は白居易の「与元九書」に見える語。岡村繁は語釈（岡村繁著、明治書院新釈漢文大系第百一卷『白氏文集五』（二〇〇四年）三六七頁）で、「優れた作者たちの到達した境地」と解釈している。

心配し、人を差し向けて尋ねさせたところ、その前の晩に急死したとのことだった。わずか二十一歳の若さだった。私は優れた才能の早折を惜しみ、彼の実兄玉井竹亭（貞太郎）<sup>7</sup>に遺稿の収集を頼んだ。多くの作品が既に散亡していたが、竹亭と相談し、収集した作品を森春濤先生に送り、『新文詩別集』への掲載をお願いした。

以上により、玉峰の人物像やその漢詩の作風は、かなりの程度まで髣髴としてくるが、実はこの叙述よりはるかに前に、玉峰の逝去後数か月と見られる時点での玉峰の玉峰に関する述懐と見なせる資料があるので、紹介したい。それは十六年一月二十三日の『東京横浜毎日新聞』「滄海拾珠」欄所載の玉峰の七絶である。この漢詩文欄は槐南が選評を担当していたもので、当時、玉峰はこの欄に作品が掲載される常連の一人だった。

まず、作品の長文のタイトルと、その書き下し文を掲げることしよう。

余親家善詩者二人。一為野村鶯溪以巳卯夏亡、一為野崎玉峰、去秋亦亡。其先後雖異、同由時疫。抑可悲哀矣。為校理其遺詩、各題一律。唯原稿散逸、訪求未遍。若其上梓行世、猶有待于他日也。

〔余が親家の詩を善くする者二人。一は野村鶯溪たり、巳卯夏を以て亡に、一は野崎玉峰たり、去秋亦亡にたり。其の先後は異なると雖ども、同時に時疫に由るは、抑ねて悲しむ可し。為に其の遺詩を校理し、各おの一律を題

7 玉井竹亭（貞太郎。一八五七—一九二八）は、その後、二十年から新潟県会議員を務め、実業界でも活躍した人物で、早通村の大地主、名主玉井唯治郎の子である（新潟県議会史編さん委員会編『新潟県議会史 明治編一』（二〇〇一年）所載「新潟県会議員略歴」）。

す。唯原稿散逸し、訪求未だ遍からず。其の上梓して世に行わるるが若きは、猶お他日を待つ有らん。」

親戚で詩を善くする人物二人がこの数年間に亡くなったことを悲しむ作品で、野村鶯溪<sup>8</sup>と野崎玉峰、それぞれに対する形で詠まれている。野村鶯溪に対する作はさておき、野崎玉峰に対する詩句の方を挙げよう。

脩斎正在妙年時

脩斎 正に妙年の時に在り

若个聰明似爾痴

若个か聰明 爾の痴に似ん

名士典刑温性格

名士の典刑〔古くからの規範〕 性格 温かに

良家子弟好容儀

良家の子弟 容儀 好し

平生解愛。離騷賦

平生 離騷の賦を解愛し

乃免呼為没字碑

乃ち呼んで没字碑〔立派な風采をしていながら文墨に通ぜぬ者〕と為すを免る

<sup>8</sup> 野村鶯溪（一八五二～一八七九）は、五峰の姑夫（父の姉妹の夫）で北蒲原郡中浦村吉浦（現在は新発田市）の人である野村禮（号養拙。一八二八～一八九三）の息子で、『北越詩話』下巻四一八頁、名は安之。五峰は幼時より彼に兄事した（同書下巻八四一～八四二頁）。

<sup>9</sup> 動詞の前にかぶさった「解」は、「能」と同様の用法の助動詞として扱い、「よくくす」と訓読し、「くすることができる」と解釈される場合がある。例えば『白氏文集』には「解愛」の二字が連続して用いられている箇所が約十箇所あり、岡村繁は新釈漢文大系『白氏文集』の訳注において、その大半をそのように訓読しているが、その訳し方には無理の感ぜられるところが少なくない。筆者はこの五峰の詩句の「解愛」は、「理解し愛する」という単純な意味で用いられていると考える。博学の五峰は『白氏文集』からも影響を受けているようだが、集中の作品をきちんと読みこなしただうえで、己の中に取り込んでいるものと思われる。

却惜清才偏短折 却惜しむらくは清才 偏短折したること  
不堪腸断読遺詩 堪えず 腸断ちて 遺詩を読むに

当時二十三歳の五峰、よくもこんな漢語が使いこなせたものだと感心させられるが、第二句の表現は袁枚の七絶「上官婉児」詩の後半「至今頭白衡文者、若个聰明似女兒」（今に至るも頭白くして文を衡する者、若个か聰明 女兒に似ん）辺りが参考にされているのではないかと思われる。第一句と合わせて、〈少年の時から精進潔斎等の仏事にいそいできた。その聰明さは馬鹿真面目とも言えるほどで、他の追隨を許さない〉といった意味で、筆者は受け止めた。なお、「痴」は仏教語としては「三毒」の一つで、この表現によくマッチする。

彼が、讒言に遭って疎んぜられた屈原（前三四三頃～前二八三頃）が憂愁幽思の中で作ったとされる『離騷』を理解し愛した（第五句）というのは、彼の詩の作風からすると意外であるが、五峰のこのような見方については、後でまた少し考えてみたい。

### 三

ここまで紹介してきた玉峰の人物像やその漢詩の作風は、すべて五峰という他者の目を通してのことである。ここからは、『新文詩別集』第二十一号に掲載された作品のいくつかをじかに詠んで、五峰の叙述の確認の意味も兼ね、玉峰の詩の作風を観察しつつ、作品から窺われる彼の生涯を、可能な範囲で考察してみたい。

さて、全作品を通読してみても、作者がそれまでの自身の人生を振り返り、そのポイントとなる事柄をいくつか暗示していると思われるのが次の作品である。



夜坐有懷（夜坐 懷うこと有り）

飄零書劍歲將殘 飄零 書劍 歲 將に残せんとす

旧恨新愁集百端 旧恨 新愁 百端（くさぐさの思い） 集まる

破壁梅横燈影小 破壁 梅 横たわりて 燈影 小に

空檐人定雨声寒 空檐 人 定まりて 雨声 寒し

交遊落落從星散 交遊（友人）は落落として 星に従いて散じ

洪劫茫茫作夢看 洪劫は茫茫 夢と作して看る

好藉酒杯排悶去 酒杯を藉りて悶えを排し去るに好し

十年身事太艱難 十年 身事 太だ艱難なりき

首聯から窺われるのは、あちこちに遊学する書生としての生活の中で

で覚えた様々な悲しみや愁いが、年の瀬になって一度にこみあげてき

て、胸がいっぱいになっているということである。頸聯は、親しくなつ

た友人も次々に離れ離れになり、かつて大きな災難を経験したが、そ

れも今となつては夢のようだと述べている。末句は、これまで十年間

を艱難辛苦の人生だったと振り返る言葉である。

実を言えば、ここに述べられている玉峰の生涯の個々の局面の真相

はほとんど分からない。特に注目されるのは「洪劫」（大きな災難）と

例を挙げよう。まずは二首連作の七絶、「新秋夜坐」。

新秋夜坐 其一

深院閨寥宵漏長 深院 閨寥（静寂）にして 宵漏 長く

燈痕如水 浸吟床 燈痕 水の如く 吟床を浸す

桐陰墜露 松梢月 桐陰 露 墜つ 松梢の月

薄病人先怯早涼 薄病の人 先ず 早涼に怯ゆ

詩作について思いを凝らしながら座っている作者の床（本来の意味な

ら、ベッド）を、灯火の明かりが揺らめきつつ、うつすらと照らして

いると歌う承句や、桐の葉から落ちた露を松の梢越しの月明かりが

照らしていると歌う転句により、しんと静まり返った新秋の夜の気配

が読む者に伝わってくる。結句について、王季園が古人の「秋冷先知是瘦人」（秋冷やかにし

て先ず知る是れ瘦人なるを」という詩句<sup>12</sup>と語意が似ているとの評を残し

参考までに「燈痕如水」の用例を探してみると、管見の限り、鄭文焯

<sup>10</sup> 参考までに「燈痕如水」の用例を探してみると、管見の限り、鄭文焯

（一八五六〜一九一八）の詞「催雪」（詞調の一種）に「瘦緑燈痕如水」、槐

南の詞「十二時 亡児生日填此寄恨」（『槐南集』卷二十八。十九年以後の作

と思われる）に「搖幌鏡痕如水」（「燈」と「鏡」は音義ともに通じる）、同じ

槐南の詞「好事近 酒間即目再依前腔」（『槐南集』同卷。初出は三十四年

九月の『新声』第六卷第三号）に「樹裏乍流螢火、是鏡痕如水」とある。そ

の他、渡貫勇（一八七〇〜？）の七絶「永坂石埭先生、画梅見贈、賦此寄呈」

に「燈痕如水古香壇」とある。

<sup>11</sup> 参考までに「桐陰墜露」の用例を探してみると、管見の限り、董潮

（一七二九〜一七六四）の七律「初夏閨居漫興 和樹石母舅韻六首」（『紅豆

獅詩人集』卷五）の第六首に「高閣桐陰墜露涼」とある。

<sup>12</sup> 白居易「贈侯三郎中」詩の一句。「秋の気が寒くなればまずそれと気付

ている。このような己の病弱に関する表現は集中の随所に見られる。

同 其二

同誰温鼎注心香

誰たれと同かにか鼎かを温かめ心香しんかう<sup>13</sup>を注つがん

寸燭挑残淚一行

寸燭すんしよく挑かげ残ざんしてて 淚なみだ 一行いっぎやう

人影不来簾不捲

人影ひとかげ 来こらず 簾すだれ 捲まかず

寒花和月転虚廊

寒花かんか 月つきと和わして虚廊きよらうに転まず

第二句は、誰も訪れてくれる人のない中、短くなってきた蠟燭ろうそくの火を掻かき立て尽くすと、蠟ろうがとろつと溶けて流れて消えたと詠んで、その流れ落ちた蠟ろうを一筋の涙と重ね合わせている。この句には、槐南の「第二句は所謂『一寸相思一寸灰』なり」との評がある。「一寸相思一寸灰」は、李商隱あざな（字義山。八二三〜八五八）の七律「無題四首」第二首の末句で、これを槐南はその『李義山詩講義』において「一寸の相思は、片端から、一寸の灰になつて仕舞ふのである。これはドウモ断念する外ない」<sup>14</sup>（「相思」はもちろん恋情のこと）云々と解説している。

確かにこの句と通じるころはあるが、玉峰の句はあきらめの気持ち述べたものではなく、綿々として尽きない人恋しさ（特に女性に対す

くのも瘦せた私である」（岡村繁著、明治書院新釈漢文大系第百五卷『白氏文集』（二〇〇五年）二九七頁）の意。

<sup>13</sup> 「心香」は仏教語で、通常「中心の誠。香を焚き仏に供する潔斎の心」を意味する語だ（『大漢和辞典』巻四、九三九頁）が、ここではそのようなニュアンスをまといつても、香そのものを意味し、句全体として共に香を焚いて夜を過すごしてくれる人のいない寂さびしさを歌うたっていると思おもわれる。

<sup>14</sup> 森槐南『李義山詩講義』下巻（文芸堂書店、一九一七年）三三四頁。

る）を詠んだものと見たほうがいいだろう。月の明かりに照らされた、秋に入つて少し冷ややかな感じのするようになった花の影が、一人ぼっちの我が部屋の壁面を滑るように移っていくと詠み、同時にそれを見やりながら眠りに付けずにいる作者の姿を彷彿とさせる結句は出色である。

なお、この一首には、泰園が「長吉の鬼才、此の詩こ之これを得たり」との評を付けている。長吉とは、言うまでもなく、異常に冴さえた、独特な作品世界を持ち、不遇のまま早世した李賀（七九一〜八一七）の字である。

前述の通り、玉峰には、夜一人ぼっちでじつと己おのが内面を見つめて過すごすといつた感じの作品が多いのだが、それは自宅以外で夜を過すごす場合も同じだった。五峰の思い出でも触れられていた村杉温泉宿泊時のことを詠んだと思われる七絶二首があるので、取り上げておこう。季節は春である。

村杉客夜

暗泉鳴咽繞階流

暗泉あんせん 鳴咽なげんして 階きざを繞まつて流ながれ

燈火深窓夜意幽

燈火とうか 深窓しんそう 夜意やい 幽ゆうなり

戸戸浴場人語定

戸戸こゝこゝの浴場ゆば 人語ひとご 定さだまり（人の話し声が途絶え）

一簾春雨慘於秋

一簾いつれんの春雨はるのこ 秋あきよりも惨あはたり

聞斎圍繞小屏斜

聞斎かんさい 圍繞いじょうし 小屏しょうへい 斜しやめなり

自試沙甌一淪茶

自みづから沙甌さおうを試こみ 一ひとたび茶ちやを淪にる

矮几低窓春雨静

矮几あいき 低窓ていそう 春雨はるのこ 静しずかに

書燈紅瘦夜深花

書燈しよとう 紅あかく瘦やせたり 夜深よのふかきときの花

第一首の起句は杜甫の「日暮」詩の一句「石泉流暗壁」(泉がほの暗い石壁を伝って流れている)に基づいた表現かと思われるが、泉が流れるさまを「嗚咽して」と詠んだところに、この詩人のカラーが出ていると言えるだろう。夜が更けた後の春雨が、秋雨よりも惨(痛ましい、厳しい、みじめ等の意味合い)たるものとして感じられるのも、より一層この作者独特の感性である。

第二首の結句は、「書燈 夜深きときの花よりも紅く瘦せたり」と読んだ方がいいのかもしれないが、いずれにせよ、この句から連想されるのは、蘇軾(号東坡。一〇三六―一一〇二)の「海棠」詩の「只恐夜深花眼去、更燒高燭照紅粧」(只だ恐らくは夜深くして花眼り去らんことを。更に高燭を燒して紅粧を照らさん。)で、この二句が玉峰の念頭にあつたかもしれない。ただ、玉峰が思つたのは、蘇軾のように、眠りについてしましそうな夜中の花をとびつきり長い蠟燭で照らし出して、その美しさを眺めて楽しむというのではなかった。机の上の燈火が、今にもしぼんでしましそうな夜更けの花と同じくらい(あるいはそれよりもなお)細く頼りなくなつていることが、彼に感慨をもたらしたのである。

じつとして一人ぼっちで過ごすのは、夜だけに限つたことではなかった。時期にもよるだろうが、終日そのようにして過ごすことも少なくなかつたようである。「寓樓即事」と題する七絶二首がある。「寓樓」であるから、誰かの家に身を寄せて仮住まいさせてもらつていたわけである。作者の意識の仕方次第では、それは上述の「贅」した野崎家のことかもしれないが、いずれにせよ、具体的な事柄は未詳である。

#### 寓樓即事

青山緑樹染爐烟	青山 緑樹 爐烟 <small>(香炉の煙)</small> に染まる
鎮日樓居似小年	鎮日 <small>(終日)</small> 樓居す 小年 <small>(一年近く)</small> に似たり
無事讀書仍飲酒	事無く 書を読み 仍酒も飲む
何須脩得到神仙	何ぞ脩め得て神仙に到るを須いん

小樓日永夢初醒	小樓 日 永く 夢 初めて醒めたり
過雨無痕涼滿庭	過雨 痕 無けれども 涼 庭に満つ
苔氣上簾簾欲濕	苔氣 簾 <small>すだれ</small> に上り 簾 湿らんと欲す
暮山如影夕陽青	暮山 影の如く 夕陽 青し

第一首では一日中、何の務めもなく、読書や飲酒で長い一日をやり過ごしている生活が詠まれている。そのような日々だから、昼間にぐっすり眠つてしまうことも珍しくなかつたようで、第二首など、全体として隠者の心境を詠んだものとしてもおかしくないような雰囲気きふきが漂っている。

第一首の結句(「神仙になるための修行をしているわけでもないのだが」といった意味)の印象が深かつたのか、石埭が、「筆に点塵無し。(中略)豈に人間の烟火を食らう者の語ならんや。」との評を付けている。確かにそのような趣があるが、それが二十歳を幾つも越えずに逝つた若者の作品であることに思いを致すと、そこに尋常ならざるものが感

<sup>15</sup> 大意：筆に一点の俗気もない。俗世の生活をしている者の語つた言葉とは、とても思われぬ。

じられる。

四

もつとも、一見、若年にして老成しきつたような境地を感じさせる作品とは正反対に、人恋しさが一層高じて、己が多情を持て余すと詠んでいる作品もいくつかある。例えば、次に挙げるものがそれである。

春夜

小楼如夢酒微醒 小楼 夢の如く 酒 微かに醒めたり  
 数尽沈沈玉漏声 数え尽くす 沈沈たる 玉漏の聲  
 当戸柳烟燈黯澹 戸に当たたる柳烟〔柳にたなびく霧〕 燈 黯澹  
 籠簾花霧月朧明 簾を籠むる花霧 月 朧明〔おぼろ〕  
 教簫何処夜将午 簫を教うるは何れの処ぞ 夜 将に午ならん

とす  
 添臂有人寒較輕 臂を添うる 人有らば 寒も較輕からん  
 独我倚欄眠不得 独り我のみは欄に倚りて眠り得ず  
 一時懊惱奈多情 一時〔しばらく〕 懊惱す 多情を奈せん

酒の酔いでしばらくは眠っていたのに、目が覚めてしまつて、それからはなかなか寝付けない。おりしも春の宵はなまめかしい雰圍気に包まれ、もう真夜中になるというのに、どこかで簾の稽古をしている人たちがいるようだ。自分にもそのように身を寄せ合つて一緒に過ごしてくれる人がいたら、春の夜寒もしのげるのだが。我が悶々たる「多情」を如何ともしがたい。

女性に対する関心は「独坐」と題する七律の後半では、もつとストリートな言葉で表現されている。

独坐

独坐蕭齋形影親 独り蕭齋〔書齋〕に坐し 形影 親しむ  
 (三句省略)

詩可遣愁何爾瘦 詩もて 愁いを遣る可きに 何ぞ爾く瘦せたる  
 錢雖買笑不能真 錢 笑いを買うと雖も 真なる能わず  
 憑誰慰藉無聊意 誰に憑つてか慰藉せん 無聊の意  
 起向前檐試一巡 起ちて前檐を 試みに一巡せん

陶淵明の「飲酒」詩の序や李白の「月下独酌」を連想させるような歌い起しだが、隱遁もしくは飄逸による超俗といった境地在詠まれているわけではない。詩作に打ち込めば愁いも払えように、こんなに瘦せつぼち(愁いが払えていない証拠)。「買笑」が頭をかすめることもあるが、それを「真」なるもの(異性とかわす真の愛情ということか)とも思えない。深い懊惱に襲われ、立ち上がつて家の周りを一回りしてみようとするのである。

次に七絶「夏日即事」を見てみよう。

夏日即事

午天高枕卧虚廊 午天〔昼〕 枕を高くして 虚廊に卧す  
 清簾踈簾日正長 清簾 踈簾<sup>16</sup> 日 正に長し

<sup>16</sup> 「清簾踈簾」は、杜甫の「七月一日題終明府水樓」詩の第二首に見える表現。



修竹風揺涼不定 修竹〔長い竹〕 風に揺れ 涼 定まらず

一牀残夢落瀟湘 一牀の残夢 瀟湘に落つ

夏の真昼間に寝ていた。竹林越しに吹いてくる風の涼しさが途絶えて、ふと目が覚めると、見果てぬ夢の残像は瀟湘の眺めだった。瀟湘とは、瀟水と湘水とが合流する洞庭湖の南、あるいは広く湖南一帯を指す地名であるが、中国の韻文やこれに影響を受けた我が国の漢詩では、一種独特なイメージを帯びた語として用いられた。ここで、浅見洋二氏のこの語に関する研究成果を援用させていただくことにした。

浅見氏は瀟湘について「古くから濃密な神話の文学的記憶をまとった土地であり、それが喚起せしめるものは一言では蔽いつくすことができない」としたうえで、様々な作品における用例を挙げ、最終的には「女性の別怨離情と結び付く文学的トポス」という言葉で総括しておられる<sup>17</sup>。玉峰がこのような中国の詩文における意味合いをちやんと踏まえた使い方をしているとした場合、夢から覚めた時、彼の臉の裏にあつた残んのイメージは、神話によつて理想化され美化された、一種妖艶な女性の姿だったように、筆者には思われてならない。蓉塘が、「涼氣溢紙、襲人衣袖。可以洗俗塵、可以鑷宿垢。」〔涼氣 紙に溢れ、人の衣袖を襲う。以て俗塵を洗う可く、以て宿垢を鑷く可し。〕という評を付け、涼氣が作者の気持ちをしつきりさせてくれたという、作者を善導するかのような、「健全」さ志向の解釈をしているが、いかがなものか。

清い竹むしろに、まばらに編んだ簾の意。

<sup>17</sup> 浅見洋二「閨房のなかの山水、あるいは瀟湘について——晩唐五代詞における風景と絵画——」〔『集刊東洋學』第六十七号、一九九二年〕五十五〜五十八頁。

少数しか残っていないとはいえず、玉峰の作品の全体的な傾向から見た場合、的外れな解釈のように感じられる。

## 五

さて、玉峰が、玉峰は「貌、美女の如く」、穏やかで素直で折り目正しく慎み深く、「娘子秀才の風」があつたと回顧していたが、玉峰は男性が女性に成り代わつて歌う閨怨詩もいくつか残している。まずはタイトルに閨怨詩であることを明示した「春夜閨詠」を見てみることにしよう。

### 春夜閨詠

金釵委地鬢雲斜

金釵 地に委ち 鬢雲〔ふんわりとした美髪〕

斜めに

春夢如烟隔碧紗

春夢 烟の如く 碧紗に隔てらる<sup>18</sup>

但道天庭院白

但道 庭院の如くは 天明 庭院 白からんと

不知残月逗梨花

知らず 残月 梨花を逗はんとは

春の宵、一眠りして釵も落ち髪型も崩れてしまったけれど、目が覚めてみると、夢で見た幸せな情景は幻だった。外は白んでいるようだから、もう夜が明けたのだとばかり思っていたら、まだ空に月が残っていて、哀れな梨の花をからかうかのように、かすかに照らし出して

<sup>18</sup> 本句は李白の「烏夜啼」（これも閨怨詩）の「碧紗如烟隔窓語」の句にヒントを得ているかもしれない。

<sup>19</sup> この「但」は「但」の誤りであること、明らか（当時の印刷物によく見られることだが）。

いる。と詠まれた梨の花は、もちろん独り寝をかこつ、作者に仮託された女性の暗喩である。

次に掲げる作品も、十分に閨怨詩として読むことのできるものである。

### 懊惱

蓮漏声沈酒又消 蓮漏〔水時計〕 声 沈として 酒も又 消め

たり

虚堂人去夜迢迢 虚堂 人 去りて 夜 迢迢〔長い〕たり

別離原識非多日 別離 原 多日に非ざるを識れるも

懊惱無端也一宵 懊惱 端無くも また一宵

微月透簾秋欲瘦 微月 簾を透りて 秋 瘦せんと欲し

寒花倚壁夜空嬌 寒花 壁に倚りて 夜 空しく嬌し

剔燈孤坐凄難寐 剔燈を剔り孤坐して 凄として寐難く

更把残香手自燒 更に残香を把りて手自ら焼す

この作品には石埭の「言言懊惱、字字惱公。僕本恨人君真情種。」との評がある。「惱公」と言えは、この二字を題とする李賀の作品が連想されるが、その作品は李賀が都で妓女ぎじよの家に遊んだことを述べたもので、玉峰のこの作品の内容には合わない。ここはこの二字の原義に立ち返り、「おれ様をなやますもの」、すなわち「懊惱」と同義の語と解しておきたい<sup>20</sup>。さて、そうすると、石埭の評は、「詩中のあら

ゆる言葉が、タイトルそのままに懊惱を表すものばかりだ。私もともと「恨人」だが、あなたも本当に「情種」ですな。」といったような意味になる。「恨人」や「情種」は、中国の明清時代に人物評において使われるようになった言葉で、合山究氏によれば、前者は「情痴の人」というほどの意味、後者は多情多感の風流人という意味である<sup>21</sup>。「多情多感」でなければ詩はできないから、詩人にとつてそのようなメンタリテイは当たり前のことなのだが、石埭は、そのような中でも特にその点が抜きんでている人として玉峰の人物像を捉えたのだと言つていいだろう。

### 六

以上、その特色がよく表れていると思われるものを中心に、玉峰の作品を紹介してきたが、一部、若干趣の異なった作品もあるので、二三、取り上げることにはしたい。

### 初夏山村

濁流経雨漲晴川	濁流	雨を経て	晴川〔雨上がりの川面〕に漲る
踏破山村十里烟	踏破す	山村	十里の烟
一路薰風天欲暑	一路	薰風	天 暑からんと欲す
夕陽高樹宿鳴蟬	夕陽	高樹	鳴蟬〔鳴くセミ〕 宿る

初夏に山村を十里にわたつて踏破したという、極めて健康的な内容

<sup>20</sup> 李賀の「惱公」の題意については鈴木虎雄注釈『李長吉歌詩集』上（岩波文庫、一九六一年）二三七頁を参照されたい。

<sup>21</sup> 合山究『明清時代の女性と文学』（汲古書院、二〇〇六年）二十七―二十八頁。

の作品である。

夜過浦瀆〔夜 浦瀆を過ぐ〕

扁舟凌海氣猶豪 扁舟〔小舟〕 海を凌ぐ 氣 猶お豪なり

吹破鉄簫平夜濤 鉄簫を吹破し 夜濤〔夜の大波〕を平らぐ

天半星辰揺欲落 天半〔空の中ほど〕 星辰 揺れて 落ちんと欲し

片帆出沒月光高 片帆〔一艘の舟〕 出沒して 月光 高し

夜の浦浜（現在の新潟市西蒲区五ヶ浜・角海浜）からの海の眺めを詠んだものである。槐南の「筆を落とせば嶽を揺さぶり、嘯傲〔放歌長嘯〕して滄〔青海原〕を凌ぐ<sup>22</sup>の概有り」との評に待つまでもなく、豪快な感じのする作品である。

ところで、五峰の前掲の詩に、玉峰が少年の時から精進潔斎等の仏事にいそしんできた旨詠まれていたから、彼の仏道とのかかわりという点にも目を向けなければなるまい。作品中に「香を焚く」ということがよく出てくる。この焚香がすでに仏道に密接に関係するが、玉峰は体が弱いこともあって、日々今生・来世といった方面の物思いにも耽っていたようである。「夜坐有念、次中山詞兄見寄韻」と題する作品は、「中山詞兄」から送られた詩に次韻したもので、「中山詞兄」がどのような人なのか、そしてその作品がどのようなものだったのかという、前提になる点が不明なので、読み込みにくい面があるが、一応

掲げてみることにしよう。

夜坐有念、次中山詞兄見寄韻

〔夜坐 念うこと有り、中山詞兄 見寄せる韻に次す〕

今生真欲現何身 今生 真に何の身をか現せんと欲する

弥勒龕空無物親 弥勒龕 空しく 物の親しむ無し

忽地伝来夜梅氣 忽地伝わり来る 夜梅の氣

一燈寒影一詩人 一燈の寒影 一詩人

煎じ詰めれば、自分は何なのかという自問自答であるが、『法華経』観世音菩薩普門品の教えに倣い、自分はいかなる身で得度すべく、この世に姿を現したのかと問うているのである。いわゆる弥勒信仰のようなものには関心が向かない。ふと梅の香りが漂ってきた。そこに、燈火に照らされてできた、ひんやりとした感じの人影（もちろん我が身の影）。その瞬間、詩人としての自分のはつきりと意識された。この頓悟とでも言うべき瞬時の自己認識を、槐南がうまく説明してくれている。――「君真以詩人身得度者。而一現優曇、終如露電。悲夫。」〔君は真に詩人の身を以て得度せる者なり。而して一たび優曇現れたれども、終に露電の如し。悲しいかな。〕三千年にひとたび咲くと言われる「優曇華」が咲いたけれども、「露電」のようにはかなく、あつという間の事だった。この評語は、この夜の玉峰の頓悟を説明する言葉であると同時に、その才能のきらめきを僅かな間しか示すことのできなかつた玉峰のは

<sup>22</sup> 原文は「落筆揺嶽、嘯傲凌滄」で、李白「江上吟」（七言十二句）の第九句から「落筆揺五嶽」の五字を、第十句から「笑傲凌滄洲」の五字をそれぞれ取り出して、さらに約めた形になっている。

<sup>23</sup> 『金剛般若波羅密經』に「一切有為法、如夢幻泡影、如露亦如電」とあるのがもとになってできた語。

かない一生を惜しむ言葉ともなっているだろう。

『玉峰小詩』の最後に位置する「苦吟」と題する作品は、短い一生を何よりも詩人として生きた玉峰にふさわしい。全くの想像に過ぎないが、作品収集時の五峰の配列でも、また、それをもとにしての槐南の編集後の配列でも、この作品が締めくくりの位置にあつたのではないかという気がしてならない。

### 苦吟

凡坐蕭齋費苦吟 蕭齋に凡坐きざ〔二人端座する〕して 苦吟に費やす  
寒窓破壁一燈深 寒窓 破壁 一燈 深し  
眼前詩料難取得 眼前 詩料〔詩を作る材料〕 取得し難し  
都被前人獲我心 都すべて前人に我が心を獲とられたり

心に浮かんでくる詩想はいろいろとあるものの、すべてこれまでの詩人に表現されてしまつているとして、書齋に端座して詩の表現に苦しんでいる自分の姿を詠んでいる。

### おわりに

以上、『新文詩別集』第二十一号で特集された『玉峰小詩』計三十首中の十六首を取り上げて、そこに込められた詩人の思いをできるだけ汲み取ろうと試みた。すべての作品を紹介したいところではあるが、それはまた別の機会があれば実行したいと思う。

『新文詩別集』同号では、玉峰の全作品を評と共に掲載した後、まず玉峰を追懐しその早逝を傷む五峰の七絶五首と、〈その五首は玉峰の遺稿を整理し終わった日がちょうど一周忌の日で、その日に題して

仏前に備えたものである〉旨を述べた十七年十月四日付の五峰の識語、次に前掲の春濤の識語、そして最後に十七年四月朔日を日付とする、槐南の玉峰の作品に対する感想を主な内容とする七絶二首が掲載されている。紙幅を取りすぎるので、五峰の第三首についてのみコメントしておくことにしたい。例の玉峰の「離騷」愛読の件に関するものである。

招魂幾次把香燒 魂を招かんとして幾次か香をば焼きたらん  
誦到遺篇淚濕袍 遺篇いへんに読み到りて 淚ほろ袍ぼう〔上着〕を濕うるす  
香草美人哀婉語 香草美人 哀婉あいえん〔婉曲に悲しみを伝える〕の語  
従今我欲廢離騷 今より 我 離騷を廢せんと欲す

屈原の「離騷」は自分を放逐した君主への綿々たる思いを美人に対する思慕という形に仮託して詠んだものであるため、転句に言うような「香草美人 哀婉の語」が散りばめられ、それらの持つ独特な雰囲気彩られている。「離騷」の表向きのテーマと、玉峰の作品世界とは、上述の如く、ほとんど重なり合うところがないけれども、作品が漂わせている嫋嫋じょうじょうとして繊細な雰囲気は確かに相通じるものがある。少なくとも五峰にはその点が強く感じられ、そのためこれからは「離騷」を手取るのをやめようと言ったわけだろう。

終わりに、外的証拠は何もないが、他界直後の玉峰の部屋を五峰が訪れて詠んだものに違いないと思われる七絶二首が、十五年十月二十九日の『東京横浜毎日新聞』「滄海拾珠」に載っているので掲げ、若干のコメントを付して、本稿を閉じることにした。



破壁

五峯 坂口恭

破壁 蕭条足暗愁 破壁 蕭条〔物寂しい〕として 暗愁 足る  
 古燈吹影<sup>24</sup> 雨啾々 古燈 影を吹きて 雨 啾々  
 傷心 一掬懐人涙 傷心 一たび 人を懐う涙を掬い  
 灑向陰房鬼哭秋 陰房〔奥深く薄暗い部屋〕に灑がん 鬼哭の秋

一別 死生知也難 一別 死生 知るも難し  
 偷將暗淚灑蘭干 偷かに暗淚をば灑げば 蘭干〔はらはらと〕たり  
 哀香欲統招魂賦 哀香 招魂の賦を続けんと欲すれば  
 古竹如人倚暮寒 古竹 人の如く 暮寒に倚る

第一首には「啾々」とあり、「鬼哭」とあるから、そこからすぐに連想されるのは、杜甫の「兵車行」である。杜甫は「君見ずや 青海の頭、古来 白骨 人の収むる無く、新鬼は煩冤し旧鬼は哭し、天陰り雨湿るとき声啾啾たるを」と、戦場の凄絶さ・悲惨さを歌った。五峰はこれを主亡き後の玉峰の部屋の形容に転用した。「啾々」は杜甫の詩では、雨が降ってじとじと湿り気を帯びてきたときに亡霊が発する泣き声の形容なのだが、五峰にはそのとき降っていた雨の音その

ものが玉峰の亡魂の叫びとして聞こえたのである<sup>25</sup>。  
 【付記】脱稿後、野崎玉峰の作品のうち、「新秋夜坐」二首は、「玉峯樵史 元」という作者名で、王黍園・槐南の評ともども、小林二郎編輯兼出版『新潟才人詩』第二集（十八年十二月三十日）に収載されていることを知った。

<sup>25</sup> 「啾啾」を雨音そのものの形容として用いた句としては、朱誠泳（一四五八〜一四九八）「將軍行」の「風雨啾啾鬼宵哭」などが見いだせるが、「鬼哭」の語と併せ、戦争とは別の、個人の亡魂への哀悼のために用いた例はあまり見当たらずに思われる。

<sup>24</sup> 「燈が影を吹く」という表現は、やや奇異に感じられるが、梁川星巖（二七八九〜一八五八）の「春夕留土錦小飲、賦詩写懷」詩の末句に「一椀春燈吹影斜」とある。これを伊藤信は「一椀の春の燈火の影が斜に風に吹かれてゐる」と解釈している（伊藤信『註解星巖全集』甲集、三三六頁、梁川星巖全集刊行会、一九五六年）。これに倣い、「古い燈火の影が風に吹かれ」と解しておく。

〈筆者〉神戸女子大学非常勤講師・

武庫川女子大学言語文化研究所研究員